

Significance and issues of nature experiences of children with developmental disorders and mental disabilities

Kanae Watanabe

Abstract

Various experiences develop children and are important for fostering a zest for living. In particular, experiences in nature during childhood have important effects on children's humanity (Carson, 1956). However, disabled children face severe limitations in terms of opportunities to experience nature. In Japan, recently, according to the "Act on the Utilization of Funds Related to Dormant Deposits to Promote Public Interest Activities in the Private Sector," projects for eliminating the experience gap have been carried using dormant deposits. Ocean Family (an authorized non-profit organization) has been selected as one of the groups to execute this project, and it has implemented a three-year plan for a summertime seaside experience program for children with developmental disorders and mental disabilities. We researched the experiential learning of diverse children using a questionnaire and observational methods during the Ocean Family program for a period of three years. The aim of this study was to investigate the current situation and issues pertaining to the nature experiences of children with developmental disorders and mental disabilities based on a qualitative analysis of a questionnaire administered to volunteers and child day care center staff who support children during marine activities after the first year of the project. The results show that volunteers' and staff's main hope and expectations for the seaside experience program included "enjoyment" and "sense of wonder." Volunteers and staff understood that the children enjoyed the program very much. In addition, adults (volunteers and staff) enjoyed and learned very important things about children, from children, and through children even though the experiences were few in number and the activities were completed within 1.5 hours.

発達障害・知的障害を持つ子どもたちの 自然体験活動の意義と現状

渡 部 かなえ

1. 緒言

子ども達は体験を通して、感動したり興味関心をもち、「なぜ、どうして?」と考えたり、対象に働きかけ、関わり、やってみようとする。体験は思考や実践の出発点であり、よりよい生活や豊かな人生を創っていく基盤として重要である。特に自然体験は、子どもたちがセンス・オブ・ワンダーを持ち、持ち続けることに不可欠であり、人間性に大切な影響を及ぼす (Carson, 1998)¹⁾、しかし、障害を持っている子や生育環境に事情のある子どもは、自然体験の機会が極めて限られており、子どもたちの間に体験格差が生じている。そこで日本では、「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」(内閣府、2016)²⁾に基づいて休眠預金を活用して「体験格差解消事業」が行われることになった。

実際の事業展開は民間に委託して行われることとなり、資金分配団体として政府に認定されたB&G財団が、障害児やひとり親家庭、児童養護施設の子どものなどを対象に海洋性レクリエーション等の自然体験活動を通じて、子どもたちの心身の成長を促すとともに、インクルーシブ社会の実現に向けた取り組みを行う実行団体を公募し、全国から選ばれた10の実行団体に対して2020年から2022年までの3年間、事業費等の助成を行うこ

となった (B&G, 2020)³⁾。その実行団体の1つに選ばれた認定 NPO オーシャンファミリーは、児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたちを対象としたプログラムを3か年計画で行い、3年後に事業化を目指す「みんなの海遊びプロジェクト」を実施することとなった (認定 NPO オーシャンファミリー、2020)⁴⁾。我々は、このオーシャンファミリーの3年間の体験活動プログラムの評価のために必要な調査研究を行っていくことで、子どもたちの体験格差を解消して、発達障害・知的障害を持つ子どもたちの自然体験活動を通した育ちの支援に貢献することを目指している。

本研究はそのスタートとして、プロジェクトの初年度 (2020 年度) に子どもたちの海遊びに参加して活動をサポートしてくれたボランティアと児童デイケア施設スタッフへのアンケートの質的分析を行い、3年間の総合的な検証の基盤となる発達障害・知的障害を持つ子どもたちの体験活動の意義や効果と現状を、子どもたちと一緒に体験活動を行い、子どもたちの様子を近くでみていたボランティアと施設スタッフの視点から明らかにすることを目的として行った。

2. 方法

2020 年度のプログラム参加者は、児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたち 24 名で、年齢は4歳～17歳、内訳は男児 17 名・女児 7 名であった。全日程参加した子どもも、1日だけ参加した子どももあり、毎回の参加人数は 17 名程度であった。

初年度である 2020 年は、8 月 12 日、8 月 29 日、9 月 26 日の 3 回、活動を行った。1 日の実質の活動時間は 90 分 (事前のライフジャケット装

着や水分補給、日焼防止対策等の準備と事後のシャワーや着替え等を含めると3時間)であった。

活動内容(アクティビティ)は、海水浴・泳ぐ・浮く・海辺の生き物観察・ボディボード(小型で軽量のサーフボード)、シーカヤック、大きなフロート(複数人の子どもが載っても浮いている浮き具)に乗る・フロートから海にダイブする、砂浜での砂遊び等から、子どもたち一人一人がやりたいことをやる・チャレンジするというものであった。なお、子ども1名に最低1名のボランティアまたは児童デイケア施設スタッフが必ず付いて、一緒に活動しながら安全確保と体験の共有をするようにした。そして海辺の活動の専門家であるオーシャンファミリーは、アクティビティの提供とその安全な実施、および全体の安全管理を、海中と陸地(浜)の両方から担った。

調査は、オープンエンド型の質問(回答者本人および子どもの属性に関する質問のみ数値回答や選択肢式)からなるアンケート用紙をボランティアと児童デイケア施設スタッフに配布し、回答への協力を依頼した。データの解析は質的研究手法である主題分析(Braun and Clarke, 2006)⁵⁾を用いて行った。

アンケート(*)の主な質問項目は

- (1) 海遊びの前に、子ども達に海遊びを通して何を感じてほしいと思ったか、どんな体験をしてほしいと考えたか
- (2) 海遊びをする子ども達を見て、感じたこと、考えたこと
- (3) 海遊びを終えた子どもたちを見て、感じたこと、考えたこと
- (4) 子どもたちの、海遊びの体験前と後を比較して
- (5) 海遊びで、ボランティア・児童デイケア施設のスタッフ自身の、一番心に残ったことであった。(※アンケートの全内容は文末の添付資料

に記載)

3. 結果

回答者数 32 名、回答率 97.0% で、活動に参加したボランティアと児童
デイケア施設スタッフのほぼ全員から回答を得ることができた。

表 1：海遊びの前に、子どもたちに感じてほしい・体験してほしいと思ったこと

楽しんでほしい	31
自然や生き物（センス・オブ・ワンダー＊）	13
これまで経験したことのないことの体験	13
仲間との共有、信頼関係	4
思い切り体を動かしてほしい	3
海や水を怖がらなくなしてほしい	2
楽しい経験をしながら、怖さも知ってほしい	2

子どもが海遊びに参加するにあたって、サポートしたほとんどのボランティアと児童デイケア施設スタッフが願っていたのは「楽しんでほしい」ということであった。また、自然や生き物に触れることによるセンス・オブ・ワンダー（レイチェル・カーソン）¹⁾ も多くのボランティアと児童デイケア施設スタッフが期待していた。加えて、体験の機会が少ない子どもたちなので、これまで経験したことがない体験をすることへの期待も大きかった。さらに他者との交流も少なく、信頼し合える人の範囲も限られている子どもたちなので、活動を通して他者と交流でき、仲間づくりや信頼関係を構築することへの期待や、日常の活動レベルが低い子どもたちが多いため、思い切り体を動かしてほしいという願いもあった。なお、水を怖がる子どもには、怖がらなくなっ楽しんでほしいという願いが、逆に危険を察知できない子どもには、楽しみながらも危険（怖さ）を知っ

てほしいという思いがあった。

表2：海遊びをする子ども達を見て、感じたこと、考えたこと

楽しそう、嬉しそう、気持ちよさそう、もっと泳ぎたい、好奇心	31
チャレンジできた、遊びの輪が広がる、積極性（などの成長）	5
次第に海に慣れて楽しんでいく、次第に楽しくなってきた	5
いろいろな感情（楽しい、ちょっと怖い、感動、未知への興味）	1
嫌がる、パニックを起こすなど、海に入れない	3

ボランティアと児童デイケア施設スタッフのほとんどが、子どもたちが楽しい経験をしていたと回答していた。また、チャレンジできた、遊びの輪が広がる、積極性を示したなど、成長した姿が見られたと述べていた。さらに、最初は怖がったり嫌がったりしていた子も、海に慣れるにしたがって楽しめるようになっていったとの記述もあった。なお、少数ではあるが、最後まで嫌がっていたり、パニックを起こしてしまって海に入れなかった子もあり、そういう子どもたちは砂浜で遊ぶなど、その子なりの過ごし方をしていた。

表3：海遊びを終えた子ども達を見て、感じたこと、考えたこと

笑顔、楽しそう、充実した表情、満足、元気、コミュニケーションが弾んでいた、普段（施設では）見られない表情や行動	16
まだまだ遊び足りない・遊びたい、海から出たくない・帰りたくない、また来たい	11
落ち着いた表情、ストレスが軽減されていた	4
淡々としていた	1
とても疲れていた	1
いろいろな子がいた（満足げな子ともっと遊びたがる子、など）	2

海遊びを終えた子どもたちも、やはり多くが笑顔で、充実、満足した表情を見せていたとのことであった。また、まだ遊び足りず、帰りたくないという子どもも少なからずいたとのことで、満足した子も、まだ満足して

いない子ども、みんな楽しんだことが分かった。さらに、「落ち着く」「ストレス軽減」など、穏やかな気持ちになれた子どもいることが推察された。けれど、普段あまり活発な活動をしていないため、あまり体力がなく、疲れてしまった子どもいたようであった。

表4：子どもたちの、海遊びの体験前と後を比較して

海が好きになった	11
力強くなった、チャレンジして自信がついた、海や水への恐怖心が減った、生き物が苦手だったのに触れるようになった	10
笑顔が増えた、生き生きとして目が輝いていた	5
子どもとスタッフの関係がさらに良くなった	1
心身ともに解放された	1
いろいろな子がいた	1
特に変わらない	4

最も多かった答えは「海が好きになった」であった。また、力強くなり、飛び込みや人の輪に入ることに挑戦して自信がつく、苦手なもの・ことが克服できるなど、短時間の体験活動であったが成長を示唆する回答が多く得られた。さらに活動後は、笑顔が増え、生き生きとして目が輝くなど、子どもたちが明るく前向きな気持ちになれたことが回答から推察された。加えて、回答数は少なかったが、人間関係がさらに良くなったり、心身ともに解放されるなどの効果があったという回答も得られた。

表5：海遊びで、ボランティア・児童デイケア施設のスタッフ自身の、一番心に残ったこと

嬉しかった、よかったと思った	計 18
↑（理由）子どもたちの笑顔や楽しそうな表情、普段見られない姿を見られて	12
海には入れなかった子が入るようになって	3
子どもたちがそれぞれの過ごし方ができた	1
子どもたちがリラックスできた	1
保護者から、子どもが海で楽しんだようだとのお礼の連絡	1
子ども理解	計 8
↑（内容）イメージが変わった	3
子どもと共感できた、仲良くできた	2
笑顔の子どもたちを取り巻く大人たちも笑顔になった	1
子どもたちから学ぶことがあった	2
自分も海が楽しかった	計 3
安心安全が少しおろそかになった	計 1

子どもたちの海遊びのサポートをしたボランティア・児童デイケア施設のスタッフ自身の心に残ったのは、「嬉しかった」「よかった」と思ったことで、その一番の理由は、子どもたちの笑顔や嬉しそうな表情、普段見られない生き生きとした姿であった。また、最初は海を怖がったり嫌がったりしていた子が、海に入れるようになって楽しく遊べたことを嬉しく感じた、海には入れなかった子も含め、どの子もそれぞれの過ごし方ができたことや、リラックスして過ごせたことをよかったと思ったなどの回答もあった。

子ども理解につながったことが分かる回答も複数あった。活動前は、発達障害や知的障害を持つ子どもたちは、言うことを聞かなかったり、走り回って落ち着きがないと思っていたり、弱々しい存在と思っていたが、子どもたちはちゃんとお礼を言ってくれたり、お喋りをしてくれたりして、

コミュニケーションがとれ、子どもたちへのイメージが大きく変わり、子どもたちが持つたくましさや素晴らしさに気付くことができていた。また、子どもと共感できたり仲良くできた等、子どもとの人間関係を構築することもできていた。

さらに、子どもたちが楽しむだけでなく、自分たちも海を楽しんでいた。ただし、子どもたちも自分たちも楽しくて、つい「安心安全が少しおろそかになっていた」という反省もあった。

4. 考察

健常児を対象とした海辺の自然体験活動の効果に関する学研総合教育研究所の報告（2010）⁶⁾によると、保護者のほとんどが、「(子どもが) 楽しそうだった」と回答しており、発達障害・知的障害を持つ子どもたちを対象とした本研究のボランティアと児童デイケア施設スタッフを対象とした調査結果と同じであった。また健常児は、海での体験活動への参加後に「お手伝いをするようになった」、「自信をもって行動するようになった」、「自分のことは自分でできるようになった」、「たくましくなった」などのさまざまな育ちや学びがあったことや、自然が好きになり興味関心をもったことが報告されており、B&G 財団の健常児を対象とした海洋教育事業の調査研究報告（2011）⁷⁾でも、「自然に興味を持つ」、「他の子とも話せるようになった」など、センス・オブ・ワンダーの育ちや人間関係をはじめとする様々な成長があったことが報告されていた。活動の個別の具体的な内容には違いはあるが、子どもそれぞれに育ちや学びがあり、海が好きになったというこれらの報告は、本件研究結果と共通するものであった。以上のことから、自然体験活動は、発達障害・知的障害の有無にかかわらず、子どもたち一人一人の学びや育ちに大きな効果があり必要であること

が明らかになった。

活動参加にあたって期待していたことは、先行研究（健常児）と本研究（発達障害・知的障害を持つ子ども）では、共通点もあったが相違点もあった。センス・オブ・ワンダーを持つこと、持ち続けること（レイチェル・カーソン）¹⁾につながる「自然体験」については、健常児の保護者（先行研究）^{6)、7)}も発達障害・知的障害を持つ子どもたちの活動支援に関わるボランティアや児童デイケア施設スタッフ（本研究）も期待していた。しかし、それに加えて健常児の保護者は、協調性や責任感、規律遵守などの「社会性の向上」期待していた⁶⁾。一方、発達障害・知的障害を持つ子どもたちの支援に関わる人々は何よりも「楽しんできてほしい」と願っていた。

これは、健常児は自然体験以外にもいろいろな楽しい体験の機会が得られるが、発達障害・知的障害を持つ子どもたちはそのような機会にあまり恵まれない場合が多いので、このまれな機会に楽しい体験ができることを、発達障害・知的障害を持つ子どもたちの支援に関わる人々は願っていると考えられる。また、健常児の保護者も発達障害・知的障害を持つ子どもたちの支援に関わる人々も、自然体験活動への参加に「普段できないこと」をやる・やれることへの期待をしているが、その「普段できないこと」とは、健常児の場合は「規律ある行動」や「規則正しい生活」、「自分のことは自分でやる」などの社会性や自立性のある行動、すなわちより高い次元への成長につながることであった⁶⁾。一方、発達障害・知的障害を持つ子どもたちの場合は、「（溺れることや事故の心配なく）海に浸かったり浮いたり潜ったりして遊ぶ」、「サーフボードやSUP、大きなフロートやカヤックなど普段は体験させてあげられないこと」、等、家族だけではもちろん児童デイケア施設でもやらせてあげることが難しい、多くの人の協力や社会的なサポートや理解があって初めてできることであった。

今回のプロジェクトに参加した子どもたちは、活動中も活動後も「楽しそうだった」という回答が最も多く、自然の中でのびのび遊ぶ楽しさや面白さ、気持ちよさを経験できたことは大きな成果であった。また、楽しい気持ちになったからこそ、積極的になって様々なチャレンジができ、それが体験を通した成長へとつながっていた。

なお、最初から楽しめた子もいれば、最初は怖々だったけれど、だんだん慣れて楽しめるようになった子や、海に入れなかった子もいた等、子どもによっていろいろな反応があった。これは子どもの個性や障害の特性もあるが、これまでの海遊びをはじめとする経験の差も大きいようであった。経験値の高い子どもは、初めてのことにチャレンジして得ることができた「成功体験」や「楽しかった・嬉しかった・満足したなどのポジティブな記憶」があるため、新しいことにどんどんチャレンジしていくので経験値がさらに高まる。一方、経験値の低い子どもは、新奇や未知、未経験のものやことに恐怖や不安を感じて避けてしまったり嫌がったりするので、なかなか経験値が上がらない。その結果、体験格差がさらに広がっていくと考えられる。しかし、嫌なこと、怖いことを強要されるとますます嫌になってしまうので、海が好きな子や海遊びを経験して「海が好きになった」子には、今後、さらに海での様々な体験活動の機会を提供すると同時に、どの子もその子なりの（海での）過ごし方ができ、リラックスできるということを大切にしながら、その子のペースで楽しみながら経験値を高められるよう支援していくことが重要であることが再確認された。

また、子どもの海辺の自然体験活動は、子どもたちだけでなく、サポートした大人たちにも、さまざまなメリットや効果があることが今回の調査で分かった。特に、発達障害・知的障害を持つ子どもたちは、多動で言うことを聞いてくれない、あるいは弱々しいと思っていたが、活動の中でたくさんおしゃべりができたり、何かしてあげた時にきちんとお礼を言って

もらえたりして、環境や大人の側の対応によってきちんとコミュニケーションが取れることがわかり、また、楽しければ元気に遊ぶたくましい姿を見せてくれることがわかって、子ども理解が深まったことは、障害を持つ子どもたちを取り巻く大人たちにとって、とても有意義な学びであった。

さらに、大人自身が「楽しかった」と思えることは、活動の継続に非常に重要である。一方的に子どもを支援するだけでなく、大人も子どもも参加者みんなが楽しめたことは、プログラムの継続と発展への大きな励みとなった。

安全確保に関しては、本研究の調査対象のプログラムでは、子ども一人一人に1名以上の大人がつき、どんな活動をする時も絶対にそばを離れないようにし、それに加えて、活動エリアとして定めた範囲から子供たちが出ないように沖と浜とエリア内で常に監視する役割の複数の大人を、カヤックやサーフボード、フロート（大型の浮き具）などの遊具での遊び担当の大人とは別に配置していた。健常児の場合は小学校以上の子どもであれば、バディ・システムなどを活用し、子ども同士で安全確認をしあうことができるが、知的障害を持つ子どもではそれは難しいので、子ども1名につき最低1名の大人が常に寄り添い何かあったら即座に対応できる体制を作っておく必要がある。

それでも、大人も子どもも楽しくて、つい安全管理が少しおろそかになってしまったという反省が、1名のみではあったが、出された。「子どもから目を離さない」だけでなく、「子どもを見ている大人たちのことも同時にしっかり見て支援を怠らない」ことが、海辺の活動の専門家ではないボランティアの人達に参加して貰う際の、主催者側が留意する点であることが再認識された。

今回の短時間で限られた回数の活動でも、多くの子どもたちが喜び、楽しみ、様々な学びや成長の機会となった背後には、発達障害・知的障害を

持つ子どもは体験を通しての学びの機会を持つことが制限されているという現状がある。発達障害・知的障害を持つ複数の子どもの体験活動を安全で効果的に行うには、十分な数の引率者やサポーターが必要であるが、それを確保することは、学校やデイケア施設だけでは、人的にも資金面でも容易ではない。

自然体験活動の意義と効果は、豊かな人間性や自主性、体力・健康などの生きる力の基盤を育むことであった。そして体験格差を解消することは、生きる力を育む教育の格差を解消するためにも不可欠であることが、活動をサポートしたボランティアや児童デイケア施設スタッフの視点からも明らかになった。

また、回答の中に『(子どもが)「また海にこれるようにボクの中に海をいれておくよ」と言って大きな口を開けて深呼吸した。もっと一緒にいたいな、活動出来たらいいのと思った』など、とても素敵なエピソードがあり、活動を通して、サポートする大人たちも嬉しい・楽しい体験をすることができ、また「子どもを学ぶ」だけでなく「子どもから学ぶ」「子どもを通して学ぶ」というとても大きな意義があることが分かった。

5. 謝辞

本研究は、B&G 財団の休眠預金を活用した体験格差解消事業の実行団体として選ばれた認定 NPO 法人オーシャンファミリーからの委託を受け、研究支援をして頂いて実施しています。またデータの整理で藤井敬子さん(元神奈川大学)にご協力いただきました。

【参考文献】

1. Carson R. (1998), The sense of wonder, HarperCollins Publishers, New York.

2. 内閣府（2016）、民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律、
https://www5.cao.go.jp/kyumin_yokin/law/law_index.html（閲覧：2021 年 11 月 2 日）
3. ブルーシー・アンド・グリーンランド財団（B&G 財団）（2020）、休眠預金を活用した体験格差解消事業の「事業者（実行団体）」公募のご案内、（閲覧：2021 年 11 月 2 日）
<https://www.bgf.or.jp/kyuminyokin/koubo.html>
4. 認定 NPO 法人オーシャンファミリー（2020）、【休眠預金】実行団体に選ばれました！
<https://oceanfamily.jp/2020/07/41499>（閲覧：2021 年 11 月 2 日）
5. Braun V., Clarke V. (2006), Using thematic analysis in psychology. Qual Res Psychol, 3: 2, 77-101.
6. 学研教育総合研究所（2010）、B&G 財団●平成 20、21 年度海洋教育事業 自然体験活動の効果に関する調査（抜粋）、（閲覧：2021 年 11 月 3 日）
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusouken/event/data/100222/bg-hosoku.pdf>
7. ブルーシー・アンド・グリーンランド財団（B&G 財団）（2011）、日本財団 助成事業、自然体験活動の効果に関する調査研究、海と出会い自分と出会う～自然体験活動が育むもの～

【添付資料】アンケート全文

体験格差解消事業 ○○○○○○○プログラム（*）アンケート

〈スタッフ・ボランティア用〉

* 児童デイケア施設の名称は情報保護の観点から○○……と伏せて表記

海遊びが子ども達の心と体のより豊かな育ちにつながっていくこと、子どもだけでなくスタッフの皆様や保護者の方々にとってもより実りある機会にしていくために、皆様の声を聞かせて頂き、検証に役立てたいと考えています。以下の質問（表と裏の両面）に回答をお願い致します。答えにくい質問がありましたら、空欄で結構です。

認定 NPO 法人オーシャンファミリー&渡部かなえ（神奈川大学）

1. あなたの 年齢（ 才）、性別（男・女 :○をつけてください）
2. あなたが今日、主に担当したお子さん
年齢（ 才）又は（小・中・高校 年生）、性別（男・女）、
全体把握のため担当無し
3. 今回の海遊びの前に、子ども達に海遊びを通して何を感じてほしいと思いま
したか、どんな体験をしてほしいと考えましたか
4. 海遊びの開始前に、子ども達は海遊びで、どんな動き・どんな表情・どんな
反応をすると想像しましたか？
5. 海遊びをする子ども達を見て、感じたこと、考えたことを書いて下さい。
6. 今日海遊びを経験し終えた子ども達について、感じたこと、考えたことを
書いて下さい。
7. 海遊びの前と後で、子ども達はどんなふうに変わったと思いますか。
（特に変わらなかったと思う場合は、そう書いて下さい）
8. 今日海遊びで、あなた自身、一番心に残ったことは、どんなことですか？
9. その他、何でも。

ありがとうございました。